

# Symphony Lounge

[シンフォニー・ラウンジ]

昨年11月7日、ミュゼ川崎の市民交流室で、ジョナサン・ノット&東京交響楽団「Season 6」2019/20年シーズン・ラインナップについての記者会見が開催された。「Season 6」と聞くと、もう6年目を迎えるのかと驚くばかりだが、このコンビに対する期待感はいささかも衰えていない。新シーズンも趣向を凝らしたプログラムがそろった。

会見の冒頭で、大野順二楽団長より先だっで行われたラフマニノフの交響曲第2番の演奏を振り返って、「いつまでも終わってほしくないと思うような演奏会」「ノット監督は魔法使いだ」といった楽団員からの声で紹介された。

続いてマイクを握ったノットは、大野楽団長の言葉を受けて感謝の言葉を述べるとともに、東京交響楽団との関係をこんなふうに語ってくれた。

「6年前に最初の記者会見で言ったように、これは私と東京交響楽団が歩む旅。この旅路に、多くの聴衆がついてきてくれていることをうれしく思う。終演後に感動を伝えてくれる聴衆の方々とお出会うたびに、この旅でやりかけたのはこれなのだ実感している」。

続いて発表された2019/20年シーズン・ラインナップは、ノットならではの冒険心にあふれたものになった。音楽監督ノットが指揮するプログラムを順にたどってみよう。

まず5月定期演奏会では、ブリテンのヴァイオリン協奏曲（独奏：ダニエル・ホープ）とショスタコーヴィチの交響曲第5番が演奏される。互いに共感を寄せ、友情を育んだふたりの作曲家が並ぶ。反戦主義者ブリテンと、共産主義体制に翻弄されたショスタコーヴィチという組合せの妙を味わいたい。

5月オペラシティシリーズでは、ベートーヴェンの交響曲第7番がとりあげられる。エキサイティングな演奏になることは必至。また、プー

冒険の旅は続く

ジョナサン・ノットと  
東京交響楽団の

# Season

飯尾洋一（音楽ジャーナリスト）

Text by Yoichi Iio

レーズの「メモリアル」と、現代の作曲家ヤン・ロビンによる「フォーク」が演奏される。こちらは独奏チェロ（エリック・マリア・クテュリエ）と大編成のオーケストラのために書かれた野心作。強烈で斬新なサウンドを体験させてくれることだろう。

7月定期&川崎定期では、きわめて意欲的なプログラムが披露される。ヨハン・シュトラウスⅡ世の「芸術家の生涯」、リゲティの「レクイエム」、タリスの40声のモテット「スパム・イン・アリウム」、リヒャルト・シュトラウスの「死と変容」。人生と死をテーマにしたプログラムが、16世紀のタリスから20世紀のリゲティまでの幅広い時代の作品で組まれている。ノットが信頼を寄せる東響コーラスの活躍も聴き逃さない。

10月定期&名曲全集は、アイヴズの「答えのない質問」、シューベルトの交響曲第7番「未完成」、ブラームスのピアノ協奏曲第1番（独奏：ヴァーヴァラ）というプログラム。Unanswered Question に Unfinished Symphony が続くというアイディアは秀逸！

11月定期&川崎定期では世紀末ウィーンを

# 6



生きたふたりの作曲家が対比される。ベルクの「管弦楽のための3つの小品」と、マーラーの交響曲第7番「夜の歌」。伝統的な管弦楽法や様式としての交響曲の終着点ともいうべき、極限の音楽を聴く。

11月オペラシティシリーズもノットらしい選曲だ。リゲティの「メロディーエン」、リヒャルト・シュトラウスのオーボエ協奏曲、モーツァルトの交響曲第41番「ジュピター」が並ぶ。東響首席奏者、荒絵理子のオーボエ独奏が楽しみ。リゲティ作品の精緻なテクスチャーで開始され、「ジュピター」終楽章の神がかったフーガで締めくくられるという音の悦楽。

年末の「第九」公演にノットが登場するのはうれしい驚きだ。長年、東響の「第九」といえば、秋山和慶による「第九と四季」であったが、ノットは「第九」のみの一本勝負。ノット厳選のソリスト陣と東響コーラスとともに、「第九」新時代の扉を開ける。

また、ミュゼザ川崎シンフォニーホール開館15周年記念公演として、シェーンベルクの「グレの歌」が演奏されるのも大きな話題を呼び

そうだ。なにしろオーケストラ約150人、合唱約250人、総勢400名規模の巨大編成が必要とされる大作。ノットと充実の独唱陣、東響コーラスが一人大スペクタクルをくりひろげる。新シーズンの東響コーラスの活躍ぶりは半端ではない。



「Season 6」を迎えてもなお、ジョナサン・ノットと東京交響楽団の旅が、新鮮な驚きと発見にあふれたものになることはまちがいない。6年前の会見で、ノットは「よい旅とは必ず冒険である。どこにたどり着くか、わからないもの」と語っていた。6年経っても、やはりこの旅は冒険であり続けている。これがどれほど得難い体験なのかを知るのは、きっと旅が終わった後なのだろう。

All photo by T.Tairadate